

花のき村と盗人たち

一

むかし、花のき村に、五人組みの盗人がやつてきました。

それは、若竹が、あちこちの空に、かぼそく、ういういしい緑色の芽をのばしている初夏のひるで、松林では松蟬が、ジイジイジイと鳴いていました。

盗人たちは、北から川にそつてやってきました。花のき村の入口あたりは、すかんぱやうまごやしの生えた緑の野原で、子どもや牛が遊んでおりました。これだけをみても、この村が平和な村であることが、盗人たちにはわかりました。そして、こんな村には、お金やいい着物を持った家があるにちがいないと、もう喜んだのでありました。

川は藪の下を流れ、そこにかかる一つの水車をゴトンゴトンとまわして、村の奥深くはいっていきました。

藪のところまでくると、盗人のうちのかしらが、いいました。

「それでは、わしはこの藪のかげで待つておまえらは、村のなかへはいっていって様子を見てこい。なにぶん、おまえらは盗人になつたばかりだから、へまをしないよう気をつけるんだぞ。金のありそうな家をみたら、その家のどの窓がやぶれそうか、そこの家に犬がいるかどうか、よつくしらべるのだぞ。いいか釜右工門。」

「へえ。」

と釜右工門が答えました。これは昨日まで旅あるきの釜師で、釜や茶釜をつくっていたのでありました。

「いいか、海老之丞。」

「へえ。」

と海老之丞が答えました。これは越後からきた角兵工獅子で、昨日までは、家々の闕の外で、さか立ちしたり、とんぼかえりをうつたりして、一文二文の銭をもらっていたのでありました。

「いいか 角兵工。」

「へえ。」

とまだ少年の角兵工が答えました。これは越後からきた角兵工獅子で、昨日までは、家々の闕の外で、さか立ちしたり、とんぼかえりをうつたりして、一文二文の銭をもらっていたのでありました。

「いいか 鮑太郎。」

「へえ。」

と鉢太郎が答えました。これは、江戸からきた大工の息子で、昨日までは諸国のお寺や神社の門などのつくりをみてまわり、大工の修業していたのでありました。

「さあ、みんな、いけ。わしは親方だから、ここで一服すいながらまつていてる。」

そこで盜人の弟子たちが、釜右工文は釜師のふりをし、海老之丞は錠前屋のふりをし、角兵工は獅子まいのように笛をヒヤラヒヤラ鳴らし、鉢太郎は大工のふりをして、花のき村にはいりこんでいきました。

かしらは弟子どもがいつてしまうと、どつかと川ばたの草の上に腰をおろし、弟子どもに話したとおり、たばこをスッパ、スッパとすいながら、盜人のような顔つきをしていました。これは、ずっとまえから火つけや盜人をしてきたほんとうの盜人であります。

「わしも昨日までは、ひとりぼっちの盜人であったが、今日は、はじめて盜人の親方というものになつてしまつた。だが、親方になつてみると、これはなかなかいいもんだわい。仕事は弟子どもがしてくれるから、こうしてねころんで待つておればいいわけである。」

とかしらは、する「こと」がないので、そんなつまらないひとりごとをいつてみたりしていました。

やがて弟子の釜右工門がもどってきました。

「おかしら、おかしら。」

かしらは、ぴよこんとあざみの花のそばから体を起こしました。

「えいくそつ、びっくりした。おかしらなどとよぶんじやねえ、魚の頭のさかなように聞こえるじやねえか。ただかしらといえ。」

盗人になりたての弟子は、

「まことにあいすみません。」

とあやまりました。

「どうだ、村の中の様子は。」

とかしらがきました。

「へえ、すばらしいですよ、かしら。ありました、ありました。」

「何が。」

「大きい家がありましてね、そこの飯炊釜は、まず三斗くらいはたける大釜でした。あれはえらい錢になります。それから、お寺につつてあつた鐘も、なかなか大きなもので、あれをつぶせば、まず茶釜が五十はできます。なあに、あつしの眼めにくるいはありません。嘘うそだと思うなら、あつしがつくつてみせましょう。」

「ばかりかしいことにいばるのはやめる。」

とかしらは弟子をしかりつけました。

「きさまは、まだ釜師根性がぬけんからだめだ。そんな飯炊釜やつり鐘などばかりみてくるやつ

があるか。それになんだ、その手に持つてゐる、穴のあいた鍋なべは。

「へえ、これは、その、ある家の前を通りますと、檻まきの木の生垣いけがきにこれがかけて干ほしてあります。みるとこの、尻に穴があいていたのです。それをみたら、じぶんが盜人ぬすびとであることをついわすれてしまつて、この鍋、二十文もんでなおしましよう、とそこのおかみさんにいつてしまつたのです。」

「なんというまぬけだ。じぶんのしようばいは盜人だということをしつかり肚はらにいれておらんから、そんなことだ。」

と、かしらはかしららしく、弟子に教えました。そして、

「もういつぺん、村にもぐりこんで、しつかりみなおしてこい。」

と命じました。釜右工門かまえもんは、穴のあいた鍋をぶらんぶらんとふりながら、また村にはいついてきました。

「こんどは海老之丞えびのじょうがもどつてきました。」

「かしら、こここの村はこりやだめですね。」

と海老之丞は力なくいいました。

「どおして。」

「どの倉にも、錠じょうらしい錠は、ついておりません。子どもでもねじけれそうな錠が、ついておるだけです。あれじや、こつちのしようばいにやなりません。」

「こつちのしようばいというのはなんだ。」

「へえ、……錠前じょうまえ……屋や。」

「きさまもまだ根性こんじやうがかわっておらんッ。」

とかしらはどなりつけました。

「へえ、あいすみません。」

「そういう村こそ、こつちのしようばいになるじゃないかッ。倉があつて、子どもでもねじけれそうな錠しかついておらんというほど、こつちのしようばいに都合のよいことがあるか。まぬけめが。もういつぺん、みなおしてこい。」

「なるほどね。こういう村こそしようばいになるのですね。」

と海老之丞えびのじょうは、感心しながら、また村にはいつていきました。

つぎにかえつてきたのは、少年の角兵工かくべいでありました。角兵工は、笛をふきながらきたので、まだ藪やぶの向こうで姿すがたのみえないうちから、わかりました。

「いつまで、ヒヤラヒヤラと鳴らしておるのか。盜人はなるべく音を立てぬようにしておるものだ。」

とかしらはしかりました。角兵工はふくのをやめました。

「それで、きさまは何をみてきたのか。」

「川についてどんどんいきましたら、花菖蒲を庭いちめんにさかせた小さい家がありました。」

「うん、それから？」

「その家の軒下に、頭の毛も眉毛もあごひげもまつしろなじいさんがいました。」

「うん、そのじいさんが、小判のはいった壺でも縁の下にかくしていそうな様子だったか。」

「そのおじいさんが竹笛たけぶえをふいておりました。ちょっとした、つまらない竹笛だが、とてもええ音がしておりました。あんな、ふしぎに美しい音ははじめてきました。おれがききとれていたら、じいさんはにこにこしながら、三つ長い曲をきかしてくれました。おれは、お礼に、とんぼがえりを七へん、つづけざまにやってみせました。」

「やれやれだ。それから？」

「おれが、その笛はいい笛だといったら、笛竹の生えてる竹藪たけやぶを教えてくれました。そこ竹で作った笛だそうです。それで、おじいさんの教えてくれた竹藪へいつてみました。ほんとうにええ笛竹が、何百すじも、すいすいと生えておりました。」

「むかし、竹の中から、金の光がさしたという話があるが、どうだ、小判こばんでもおちていたか。」

「それから、また川をどんどんぐだつていくと小さい尼寺あまさでらがありました。そこで花の撓とうがありました。お庭にいっぱい人がいて、おれの笛ふえくらいの大きさのお釈迦しゃかさまに、あま茶の湯をかけておりました。おれもいっぱいかけて、それからいっぱい飲ましてもらつてきました。茶わんがあるならかしらにも持つてきてあげましたのに。」

「やれやれ、なんという罪のねえ盗人ぬすびとだ。そういう人ひとみの中では、人のふところや袂たもとに気をつけるものだ。とんまめが、もういつべん起きさまもやりなおしてこい。その笛はここへおいていけ。」

角兵工かくべいこうはしかられて、笛を草の中へおき、また村にはいつていきました。

おしまいに帰つてきたのは鮑太郎かんなたろうでした。

「起きさまも、ろくなものはみてこなかつたろう。」

と、きかないさきから、かしらがいました。

「いや、金持つみがありました、金持ねずびとが。」

と鮑太郎は声をはずませていいました。金持ときいて、かしらはにこにことしました。

「おお、金持ねずみか。」

「金持つみです、金持ねずみです。すばらしいりっぱな家でした。」

「うむ。」

「その座敷ざしきの天井てんじょうときたら、さつま杉の一枚板まいいたなんで、こんなのがみたら、うちの親父おやじはどんなに喜ぶかも知れない、と思って、あつしはみとれていました。」

「へつ、おもしろくもねえ。それで、その天井をはずしてもくる気かい。」

鉋太郎は、じぶんが盜人の弟子であったことを思い出しました。盜人の弟子としては、あまり気がきかなかつたことがわかり、鉋太郎はバツのわるい顔をしてうつむいてしました。

そこで鉋太郎も、もういちどやりなおしに村にはいってきました。

「やれやれだ。」

と、ひとりになつたかしらは、草の中へあおむけにひつくりかえつていました。

「盜人のかしらというのもあんがい楽なしようばいではないで。」

一一

とつぜん、

「ぬすとだッ。」

「ぬすとだッ。」

「そら、やつちまえッ。」

という、おおぜいの子どもの声がしました。子どもの声でも、こういうことを聞いては、盜人としてびっくりしないわけにはいかないので、かしらはひよこんどとびあがりました。そして、川にとびこんで向こう岸へにげようか、藪の中にもぐりこんで、姿すがたをくらまそうか、と、とつきのあいだに考えたのであります。

しかし子どもたちは、縄なわぎれ切や、おもちゃの十手をふりまわしながら、あちらへ走つていきました。子どもたちは盜人ぬすびとごっこをしていました。

「なんだ、子どもたちの遊びごとか。」

とかしらははりあいがぬけていました。

「遊び」としても、盜人ぬすびとごっことはよくない遊びだ。いまどきの子どもはろくなことをしなくなつた。あれじや、さきが思いやられる。」

じぶんが盜人のくせに、かしらはそんなひとりごとをいいながら、また草の中にはころがろうとしたのでありました。そのときうしろから、

「おじさん。」

と声をかけられました。ふりかえつてみると、七歳さいくらいの、かわいらしい男の子が牛の仔こをつれて立っていました。顔だちの品のいいところや、手足の白いところをみると、百姓ひやくしょの子どもとは思われません。旦那衆だんなしゆうの坊ぼっちゃんが、下男について野あそびにきて、下男にせがんで仔牛を持たせてもらつたのかもしれません。だがおかしいのは、遠くへでもいく人のように、白い小さい足に、小さい草鞋わらじをはいていました。

「この牛、持つていつてね。」

かしらが何もないさきに、子どもはそういつて、ついとそばにきて、赤い手綱たづなをかしらの手にあずけました。

かしらはそこで、何かいおうとして口をもぐもぐやりましたが、まだいい出さないうちに子どもは、あちらの子どもたちのあとを追つて走つていつてしましました。あの子どもたちの仲間になるために、この草鞋をはいた子どもはあとをもみすにいつてしまいました。

ぼけんとしているあいだに牛の仔を持たされてしまったかしらは、くツくツと笑いながら牛の仔をみました。

たいてい牛の仔というものは、そこらをぴょんぴょんはねまわつて、持つているのがやっかいなものですが、この牛の仔はまたたいそうおとなしく、ぬれたうるんだ大きな眼をしばたきながら、かしらのそばに無心むしんに立つていてました。

「くツくツくツ。」

とかしらは、笑いが腹はらの中からこみあげてくるのが、とまりませんでした。

「これで弟子でしたちに自慢じまんができるて。きさまたちがばかりさげて、村の中をあるいているあいだに、わしはもう牛の仔をいつぴきぬすんだ、といつて。」

そしてまた、くツくツくツと笑いました。あんまり笑つたので、こんどは涙なみだが出てきました。

「ああ、おかしい。あんまり笑つたんで涙が出てきやがつた。」

ところが、その涙が、流れ流れてとまらないのでありました。

「いや、はや、これはどうしたことだい、わしが涙を流すなんて、これじや、まるでないているのと同じじやないか。」

そうです。ほんとうに、盜人ぬすびとのかしらはないていたのであります。——かしらは嬉うれしかったのです。じぶんは今まで、人から冷たい眼めでばかりみられてきました。じぶんが通ると、人びとはそら変なやつがきたといわんばかりに、窓まどをしめたり、すだれをおろしたりしました。じぶんが声をかけると、笑いながら話しあつていた人たちも、きゅうに仕事のことを思い出したように向こうをむいてしまつのでありました。池の面おもてにうかんでいる鯉こいでさえも、じぶんが岸に立つと、がばつたいと体たいをひるがえしてしづんでいくのでありました。あるときさるまわしの背中せなかに負われているさるに、柿かきの実みをくれてやつたら、一口もたべずに地べたにすててしましました。みんながじぶんをきらつていたのです。みんながじぶんを信用してはくれなかつたのです。ところが、この草鞋わらじをはいた子どもは、盜人であるじぶんに牛の仔こをあずけてくれました。じぶんをいい人間であると思つてくれたのでした。またこの仔牛も、じぶんをちつともいやがらず、おとなしくしております。じぶんが母牛めいしゆでもあるかのように、そばにすりよつています。子どもも仔牛も、じぶんを信用しているのです。こんなことは、盜人ぬすびとのじぶんには、はじめてのことであります。人に信用されるというのは、なんといううれしいことであります。……

そこで、かしらはいま、美しい心になつてゐるのでありました。子どものころにはそういう心になつたことがありましたが、あれから長いあいだ、わるいきたない心でずっといたのです。久しぶりでかしらは美しい心になりました。これはちょうど、あかもみれのきたない着物を、きゅうに晴着にさせられたように、奇妙なぐあいがありました。

——かしらの眼から涙が流れとまらないのはそういうわけなのでした。

やがて夕方になりました。松蟬は鳴きやみました。村からは白い夕もやがひつそりと流れだしで、野の上にひろがつていきました。子どもたちは遠くへいき、「もういいかい」「まあだだよ」という声が、ほかのもの音とまじりあって、ききわけにくくなりました。

かしらは、もうあの子どもが帰つてくるじぶんだと思って待つて待つていました。あの子どもがきたら、「おいしょ。」と、盗人と思われぬよう、こころよく仔牛をかえしてやろう、と考えていました。

だが、子どもたちの声は、村の中へ消えていつてしましました。草鞋の子どもは帰つてきました。村の上にかかる月が、かがみ職人のみがいたばかりの鏡のように、ひかりはじめました。あちらの森でふくろうが、二声ずつくぎつて鳴きはじめました。

仔牛はお腹がすいてきたのか、からだをかしらにすすりよせました。

「だつて、しようがねえよ。わしからは乳は出ねえよ。」

そういつてかしらは、仔牛のぶちの背中をなでていました。まだ眼から涙が出ていました。そこへ四人の弟子がいつしょに帰つてきました。

三

「かしら、ただいまどりました。おや、この仔牛はどうしたのですか。ははア、やつぱりかしらはただの盜人じやない。おれたちが村をさぐりにいつていたあいだに、もうひと仕事しちやつたのだね。」

釜右エ門が仔牛を見ていました。かしらは涙にぬれた顔をみられまいとして横をむいたまま、「うむ、そういってきさまたちに自慢しようと思つていたんだが、じつはそうじやねえのだ。これにはわけがあるのでだ。」

といいました。

「おや、かしら、涙……じや、ございませんか。」

と海老之丞が声を落としてきました。

「この、涙てものは、出はじめると出るもんだな。」

といって、かしらは袖で眼をこすりました。

「かしら、喜んでくだせえ、こんどこそは、おれたち四人、しつかり盜人根性になつてさぶつてまいりました。釜右工門は金の茶釜のある家を五軒みとどけますし、海老之丞は、五つの土蔵の鍵をよくしらべて、曲がった釘一本であけられることをたしかめますし、大工のあつしは、この鋸でなんなく切れる家尻を五つみてきましたし、角兵工は角兵工でまた、足駄ばきでとびこえられる塀を五つみてきました。かしら、おれたちはほめていただきとうございます。」

と鉋太郎が意氣こんでいいました。しかしかしらは、それに答えないで、

「わしはこの仔牛をあずけられたのだ。ところが、いまだに、とりにこないのでよわつているところだ。すまねえが、おまれら、手わけして、あずけていった子どもをさがしてくれねえか。」

「かしら、あずかつた仔牛をかえすのですか。」

と釜右工門が、のみこめないような顔でいいました。

「そうだ。」

「盜人ぬすびとでもそんなことをするのでござえますか。」

「それにはわけがあるのだ。これだけはかえすのだ。」

「かしら、もつとしつかり盜人根性になつてくだせえよ。」

と鉋太郎がいいました。

かしらは苦笑にがわらいしながら、弟子たちにわけをこまかく話してきかせました。わけをきいてみれば、みんなにはかしらの心持ちがよくわかりました。

そこで弟子たちは、こんどは子どもをさがしにいくことになりました。

「草鞋わらじをはいた、かわいらしい、七つぐれえの男坊主おどこぼうずなんですね。」

とねんをおして、四人の弟子はちつていきました。かしらも、もうじつとしておれなくて、仔牛をひきながら、さがしにいきました。

月のあかりに、野茨のいばらとうつぎの白い花がほのかにみえている村の夜を、五人のおとなぬすびとの盜人が、一びきの仔牛をひきながら、子どもをさがして歩いていくのでありました。

かくれんぼのつづきで、まだあの子どもがどこかにかくれているかもしれないというので、盜人たちは、みみずの鳴いている辻堂つじどうの縁えんの下や柿かきの木の上や、物置の中や、いいにおいのするみかんの木のかげをさがしてみたのでした。人にきいてもみたのでした。

しかし、ついにあの子どもはみあたりませんでした。百姓たちはちようちんに火を入れてきて、仔牛をてらしてみたのですが、こんな仔牛はこのあたりではみたことがないというのでした。

「かしら、こりや夜つぴてさがしてもむだらしい、もうよしましよう。」

と海老之丞えびのじょうがくたびれたように、道ばたの石に腰こしをおろしていいました。

「いや、どうしてもさがし出して、あの子どもにかえしたいのだ。」

とかしらはききませんでした。

「もう、てだてがありませんよ。ただひとつのことてだては、村役人のところへうつたえることだが、かしらもまさかあそこへはいきたくないでしよう。」

と釜右エ門がいました。村役人というのは、今までいえれば駐在巡査のようなものであります。「うむ、そうか。」

とかしらは考えこみました。そしてしばらく仔牛の頭をなでていましたが、やがて、「じや、そこへいこう。」

といいました。そしてもう歩きだしました。弟子たちはびっくりしましたが、ついていくよりしかたがりませんでした。

たずねて村役人の家へいくと、あらわれたのは、鼻の先に落ちかかるように眼鏡をかけた老人でしたので、盜人たちはまず安心しました。これなら、いざというときに、つきとばしてにげてしまえばいいと思つたからであります。

かしらが、子どものことを話して、

「わしら、その子どもを見失つて困つております。」

老人は五人の顔をみまわして、

「いつこゝう、このあたりでみうけぬ人ばかりだが、どちらからまいつた。」

とききました。

「わしら、江戸から西の方へいくものです。」

「まさか盜人ではあるまいの。」

「いや、とんでもない。わしらはみな旅の職人です。釜師や大工や錠前屋などです。」

とかしらはあわてていきました。

「うむ、いや、変なことをいつてすまなかつた。お前たちは盜人ではない。盜人が物をかえすわけがないでの。盜人なら、物をあずかれば、これさいわいとくすねていつてしまうはずだ。いや、せつかくよい心で、そうしてとどけにきたのを、変なことを申してすまなかつた。いや、わしは役目がら、人をうたがう疑うくせになつてゐるのじや。人をみさえすれば、こいつ、かたりじやないか、すりじやないかと思うようなわけさ。ま、わるく思わないでくれ。」

と老人はいいわけをしてあやまりました。そして、仔牛はあずかつておくことにして、下男に物置の方へつれていかせました。

「旅で、みなさんおつかれじやろ、わしはいまいい酒をひとびん西の館の太郎どんからもらつたので、月をみながら縁側でやろうとしていたのじや。いいとこへみなさんこられた。ひとつつきあいなされ。」

ひとのよい老人はそういうて、五人の盜人を縁側につれていきました。

そこで酒をのみはじめましたが、五人の盗人とひとりの村役人はすっかり、くつろいで、十年もまえからの知り合いのように、ゆかいに笑つたり話したりしたのでありました。

するとまた、盗人のかしらはじぶんの眼が涙をこぼしていることに気がつきました。それをみた老人の役人は、

「おまえさんはなき上戸とみえる。わしは笑い上戸で、ないている人をみるとよけい笑えてくる。どうかわるく思わんでくださいや、笑うから。」

といつて、口をあけて笑うのでした。

「いや、この、涙というやつは、まことにとめどなく出るものだね。」

とかしらは、眼をしばたきながらいました。

それから五人の盗人は、お礼をいつて村役人の家を出ました。

門を出て、柿の木のそばまでくると、何かを思い出したように、かしらが立ちどまりました。

「かしら、何かわすれものでもしましたか。」

と鉢太郎がきました。

「うむ、わすれもある。おまえらも、いつしょにもういつぺんこい。」

といって、かしらは弟子をつれて、また役人の家にはいつていきました。

「ご老人。」

とかしらは縁側に手をついていいました。

「なんだね、しんみりと。なき上戸のおくの手が出るかな。ははは。」

と老人は笑いました。

「わしらはじつは盗人ぬすびとです。わしがかしらでこれらは弟子でしです。」

それをきくと老人は眼めをまるくしました。

「いや、びっくりなさるのはじもつともです。わしはこんなことを白状するつもりじゃありませんでした。しかしご老人が心のよいお方で、わしらをまつとうな人間のように信じていてくださいるのをみては、わしはもうご老人をあざむいていることができなくなりました。」

そういうて盗人のかしらは今までしてきましたわるいことをみな白状してしまいました。そしておしまいに、

「だが、これらは、昨日きのうわしの弟子になつたばかりで、まだ何もわるいことはしておりません。お慈悲じひで、どうぞ、これらだけはゆるしてやつてください。」

といいました。

つぎの朝、花のき村から、釜師かましと錠前屋じょうまえやと大工かくべと角兵工獅子えじしとが、それぞれべつの方へ出ていました。四人はうつむきがちに、歩いていきました。かれらはかしらのことを考えていました。

よいかしらであつたと思つておりました。よいかしらだから、最後にかしらが「盜人にはもうけつしてなるな。」といつたことばを、守らなければならぬと思つておりました。

角兵エは川のふちの草の中から笛をひろつてヒヤラヒヤラと鳴らして行きました。

四

こうして五人の盜人は、改心したのでしたが、そのもとになつたあの子どもはいつたいだれだつたのでしよう。花のき村の人びとは、村を盜人の難からすくつてくれた、その子どもをさがしてみたのですが、けつきよくわからなくて、ついには、こういうことにきまりました。——
それは、土橋のたもとにむかしからある小さい地蔵さんだろう。草鞋をはいていたというのがしようこである。なぜなら、どういうわけか、この地蔵さんには村人たちがよく草鞋をあげるので、ちようどその日も新しい小さい草鞋が地蔵さんの足もとにあげられてあつたのである。——
というのでした。

地蔵さんが草鞋をはいて歩いたというのはふしぎなことです。世の中にはこれくらいのふしぎはあつてもよいと思われます。それに、これはもうむかしのことなのですから、どうだつて、いいわけです。でもこれがもしほんとうだつたとすれば、花のき村の人びとがみな心のよい人びとだつたので、地蔵さんじぞうが盜人ぬすびとからすくつてくれたのです。そうならば、また、村というものは、心のよい人びとが住まねばならぬということにもなるであります。

底本＊「新美南吉童話集 2 花のき村と盜人たち」

著者＊新美南吉

出版社＊大日本図書

出版年＊1982年1月31日初版第1刷発行

入力に使用＊1996年9月1日第10刷発行

入力＊安城市中央図書館職員